

会衆派教会の精神

講演	飯 謙 [いい・けん]
講師紹介	神戸女学院大学教授

はじめに—自己紹介

こんにちは。ご紹介いただきました飯謙と申します。本日は同志社の創立140周年という記念の年のスピリット・ウィークという大切な機会にお声がけをいただきまして、まことに恐縮に存じます。私は1979年に神学部を卒業しました。その頃の同志社大学のキャンパスは今出川と新町のみでした。学部数も六つでした。今は14学部だと思えますけれども、そういう意味ではコンパクトに一つの場所にまとまった学校だったかなと思います。

大学院を終えて神戸の教会で牧師になる訓練を受け、その後、1983年から神戸女学院で働かせていただいています。それからもう32年になりますので、人生の半分以上を神戸女学院で過ごしたことになります。神戸女学院は兵庫県西宮市、ここから地下鉄と阪急電車に乗って1時間半ぐらいのところにある女子大学であります。小さい大学ですけれども、人文系、社会科学系、自然科学系、さらには芸術系まで揃った、リベラルアーツカレッジを標榜した大学です。私は、その文学部総合文化学科で聖書学、宗教史といった宗教学関係の科目を担当しています。そして、神戸女学院大学には「初期神戸女学院」という自校史の授業がありまして、20世紀の末からその科目も担当し、神戸女学院がどのような経緯で、いかなる人々のお骨折りと祈りの中で創立されてきたのかということも勉強しています。

私はもともと専門としては旧約聖書に取り組みまして、今もその勉強を続けています。旧約聖書はイエスが登場する以前の文書です。学生時代、どうしてキリスト教ができたのかを考えてみたいと思い、旧約聖書の勉強を選びました。そして大変すばらしい恩師に恵まれ、良い勉強をできたと感謝しています。旧約聖書を学びまして、キリスト教の思想のこの部分は旧約聖書のあの人の思想からきているのだとか、目から鱗が落ちる経験を何度もし、古代ユダヤの文化や信仰を一生懸命学んでまいりました。同じように神戸女学院の歴史を何人かの先生方と一緒に担当しておりますが、元来の専門ではありませんから、そのための勉強もイロハから、必死で取り組んでいます。この分野にはすでに20年近く携わっているのですけれども、アメリカで起こったあの出来事がこのようなかたちで神戸女学院の伝統に加えられているのだとか、あの衝撃がこの学校で今日も生きているのだという驚きを伴う発見を、今も経験させてもらっています。

さて、それを学び始めたごく初期に、「あれれ、同志社も一緒だな」ということに気がついたのです。私も同志社で、人間形成の上で良質な素材をたくさんいただきました。よく学びましたら、その良質な素材は神戸女学院にも同志社にも、そして神戸の教会にもつながっていることがいろいろな風に見えてきたのです。その源流に、今日お話しさせていただく「会衆派教会」があります。会衆派教会は、プロテスタントの一つの教派ですが、日本に宣教師を送り、神戸女学院や同志社、大阪の梅花学園、群馬県の前橋にある共愛学園、四国の松山東雲学園など、日本中にいくつかの学校をつくってきました。この教派の精神が、実はこれらの学校の出発点にあるのだということを折々に感じてきました。それが見えてくることで、同志社の多様な伝統が一層豊かに理解できるようになってまいりました。

ここにいらっしゃる皆さんは、やがて同志社大学のOG・OBとして社会に羽ばたいていかれるわけです。順調にトントントントンと颯爽と歩いていくようにと祈っています。けれども、人間の歩みですから、いろいろな形で困難にも行きあたるでしょうし、また壁にぶつかることもあるはずです。困難を越えていけるときばかりではなく、進路の変更を余儀なくされるということもあるかもしれない。そのような岐路にさしかかる時に、自分はどういうルーツの場に身を置いたのか、学んだのか—自分の身体の中に20歳前後の時に吸った空気（学風という言葉を使いたいのだけれども）、この歴史あるキャンパスで吸っていた空気がどのようなものであったのかということが、大切な意味をもってくると思うのです。そういう時に、何かの形でお役に立てたらと願い、今日は一緒に同志社の源流にある精神、会衆派教会の精神についてお話しさせていただきたく思います。

会衆派教会の前身—宗教改革

会衆派教会とはプロテスタントの一派です。皆さん、プロテスタントと聞くと世界史でマルティン・ルターの宗教改革を思い起こされることでしょう。マルティン・ルターは1517年10月31日にドイツのヴィッテンベルクという町の中心にある教会の門に意見書を貼り出し、それが後に「宗教改革」と呼ばれ、結果的にローマ・カトリックとは別の、プロテスタント教会を生み出すきっかけを作りました。あと2年たつと500年の記念の年を迎えます。宗教改革は宗教信仰だけではなく、文化的にも非常に大きい出来事でした。とはいえ、キリスト教の世界は、もっと以前に分裂していました。紀元395年にローマ帝国が東西に分かれます。教会もローマを中心とするグループと、コンスタンティノポリス（今のイスタンブール）を中心とするグループに分かれます。お互い交流をしながらやっていくのですが、1054年、分割から600年余りたってから、お互いがお互いを破門し合う。つまり、東と西が破門し合って東西の分裂が決定的になります。東方教会と西方教会、大きく二つに分かれて今日に至っています。東方教会はロシア正教、ギリシャ正教、シリア正教など、〇〇正教と習ったことがあるかと思いますが、非常に古い伝統—初期のキリスト教はこうだったのかなと思うような古い伝統が残っている教派です。京都にも近くの二条通りにロシア正教会の伝統につらなる京都ハリストス正教会があります。

もう一つは、西方教会です。ローマ・カトリックとしてよく知られていますけれども、イエズス会とかラ・サール修道会といった修道会を設立し、日本でも学校や社会福祉事業を通してよく名前を聞くところではないかと思います。その西方教会がプロテスタントとカトリックに分かれるきっかけとなる出来事が1517年にありました。ルターはヴィッテンベルグの大学教授でしたが、「今の（カトリック）教会はおかしいのではないか。人間の罪が贖有状（しょくゆうじょう）（いわゆる「免罪符」）というような紙切れを買うことで許されてしまうなんて、おかしい」という意見書を出します。95条の意見書をヴィッテンベルグの城教会—厳密に言うと、ヴィッテンベルグ大学の教会ですから同志社のチャペルみたいなものですが、そこに貼り出してカトリック教会に質問書を出しました。カトリック教会が後にルターを破門したため、ルターは新しい教会をつくっていきます。ルターはその中で「聖書のみ、恵みのみ、信仰のみ」という高校の世界史の教科書にも出てくるような、大変有名な提題を主張したわけです。

このうち「聖書のみ」という提題が、プロテスタント教会を形成させるという意味では非常に重要な役割を果たしました。これは、キリスト教の信仰の基準は聖書だけだ、という意味です。その時ローマ・カトリックでは、ローマ教皇が信仰の決定権をもっていたけれども、ルターは、信仰の基準は聖書だけだと言ったのです。そこで、聖書を一生懸命読もう、という運動が生まれます。現代の我々は、その話を聞くと「そんなもの、読んだらいいじゃないか」ということになりますけれども、当時の聖書はそんなに簡単に手に入るものではありませんでした。15世紀の中頃にグーテンベルクが印刷機を発明して聖書が印刷されるようになったのですが、その時でも聖書はまずラテン語訳しか出版されませんでした。カトリック教会では一応、そのラテン語の聖書を公認聖書と定めました。ラテン語の聖書しかなく、英語の聖書があるにはあったけれども、ラテン語から英語に重訳した聖書だったのです。聖書は元来、ヘブライ語とかギリシア語で書かれているのですけれども、ルターより少し前、ルネサンスを支えた人文主義者（ヒューマニスト）が原典から聖書を読もうと呼びかけます。彼らは「源泉に帰れ」（アド・フォンテス）というスローガンを掲げて、ルネサンス運動を推し進め、「我々の人間性はもともと解放されたものであったのではないか。源泉に帰れ」と主張します。これは元来は教会の権力に対抗する運動でしたが、キリスト教徒の中にも支援者がいました。彼らにとっての源泉は聖書です。いろいろな規則とか伝統とか習わしとかがあるけれど、我々の源泉は聖書だ—原典で聖書を読もう、と。それで人文主義者の代表的人物であったエラスムスは多くの写本を見て1516年にギリシア語の原典版新約聖書を出版します。その少し前にヘブライ語の旧約聖書も出版されていました。15世紀の後半から16世紀の初頭にかけて、聖書をきっちりと読もうという運動が盛り上がります。まずユダヤ人から文法を学んでヘブライ語を読めるようになろう。さらに、日常語でしっかりと聖書を読めるようにしようとの呼びかけが大きくなります。そして1520年代に、マルティン・ルターは聖書を日常語であるドイツ語に翻訳するわけです。そういうことで、ルター派が少し先行するわけですが、聖書をよく読むようになるわけです。

それに続くということで、ジュネーヴのカルヴァンとかスイス・チューリッヒのツヴィングリも宗教改革の運動を始めます。もっと前にはチェコでもボヘミアでも宗教改革が行われました。そのスローガンになったのが「聖書を読もう」という精神です。そこに何が書いてあるか、みんなで考え、もう一度、自分たちがどういうことを信じようとしているのか、認識を新たにしようと話合っていきます。

会衆派教会の始まり

少しばかり、話が遠回りしてしまいました。では、会衆派教会の始まりのことに触れたいと思います。それはイングランドにおいてでした。イングランドの宗教改革は大陸より遅れてスタートしますが、1534年、少々政治的な事情が絡みます。国王の離婚の問題があって、ローマから離れた教会「英国国教会」（the Church of England）を立ち上げました。この教会は、教会の中で大切にされている伝統とは何かということをよく考え、それを守りました。しかしカトリックと同じではなく、さらにプロテスタントのような聖書主義を徹底したわけでもない。言うなれば中間的で、「中道主義」（via media）という立場を取りました。カトリックとプロテスタントの間をいく中道主義。これはこれでなかなか良いものではないかと思いますが、ルターやカルヴァンなど、大陸の宗教改革から影響を受けた人たちは、かなり不満を感じたのです。もっと徹底させた方がいいのではないかと、どっつつかずになっているのではないかと。そうして、英国国教会を改革しようとする人たちが生まれてきます。

その人たちは、分離派とか、非分離派と呼ばれるようになります。分離派（Separatist）は英国国教会から飛び出して、分離して新しい教会をつくってしまおうと考えました。一方、非分離派（Non-separatist）は英国国教会の中にどまって改革を考えよう主張しました。こうして「分離派」と「非分離派」という新しいグループができあがっていったのです。この人たちは、聖書を自分で読んでいこうという立場は共通していました。彼らの一部は、ロンドンから200キロ以上離れたスクルービーという町で集会をつくり、自分たち独自の、分離した活動を始めいきます。その中から「会衆派」（Congregationalist）というグループが生まれます。「会衆」（congregation）は教会の礼拝に出席している信徒のことを指します。果して、牧師先生とか偉い神学者が「こうだ」と言ったら、信仰はそのとおりにしか規定されないのか、違うのではないかとこの会衆は考えたわけです。彼らは、自分たち一人ひとりで聖書を読んでいこう、一人ひとりで、それぞれの感動や思いを大切にしていこう、と訴えます。キリスト教と言ったらこうだ、と画一的に決めてしまうのではなく、こういうキリスト教もある、ああいう理解もあると、多様な立場を認めていこうという運動が、分離派、非分離派の中から始まったわけです。牧師の見解に反論を述べ、それで破門された人もいたのですが、彼らは自分で聖書を読んで自由に語り合おうと、別の集会をつくって活動を始めたのです。

けれども、なかなかうまくいきません。そうして、ある人たちはついに「イングランドにいても仕方がない」といって、オランダに移住します。16世紀、17世紀のオランダは大変オープンな国で、ユダヤ教徒もカトリック教徒も、ルター派もカルヴァン派も、みんな集まってきて共同で暮らしていた国だったのです。結論を先に申しますと、しかしイングランドから来た人は、あまりうまくいきませんでした。彼らはもう一度、母国に戻ります。そして、当時すでに行われていた新大陸（アメリカ）への移住を考えるわけです。1620年のことですが、彼らはイングランド南西部のプリマスという港町から船でアメリカ大陸を目指します。途中、また到着後も厳しい冬のため、メンバーの半数ほどが死んでしまいますが、アメリカ大陸に移住しました。こうして1620年から1630年代にかけて移住が盛んに行われます。その後、清教徒革命などいろいろなことがあってイングランドの環境も変わっていきわけですけれども、1620年代からアメリカに移住していった人々は、東部のボストンと名前がついている地域に定住して共同体を作っていきます。彼らはその地域を「ニューイングランド」と名付け、自分たちの新しい住処とします。その地で、彼らはまず教会を設立し、聖書を読み、聖書の理念—互いが互いを尊重し、助け合い、愛し合い、受け入れ合って暮らしていく—ということ、「自分愛するように隣人を愛せよ」と聖書に書かれている—この理念をもって国家を形成しよう—と願い、アメリカをスタートさせます。アメリカの建国は150年後の1776年ですけれども、しかしアメリカという共同体が、そこからスタートしていくわけです。

会衆派教会の歩み

新大陸に移住した人たちは、「自由・自治」を標榜しながら共同体を形成していきます。「自由」とは、イングランドまた英国国教会からの自由ということでした。互いに寄りかからないで生きていく。お互いに自立した人間同士として生きていく。そういう共同体を形成しようと思ったわけです。彼らの合い言葉と伝えられる、「ノン・シビー」(non sibi)というラテン語があります。nonは分かんかと思えます。sibiは英語でselfにあたる言葉です。ですから、non sibiは「自分のため、ではなく」、つまり「隣人のために」という意味になります。彼らはそれを一つのスローガンに、新しい共同体をつくらうとしていったわけです。他にも「全体の善」(メイフラワー号の盟約 1620年)とか「後継者のために」(コネチカット基本法 1639年)といった言葉も見られます。アメリカで会衆派教会を最初に花咲かせた人たちは、このような言葉を使いながら、新しい共同体の形成を志していったのです。これが会衆派成立に至る出来事ということです。

少しまとめます。イングランドで宗教改革があった。その宗教改革に不満をもった人がいた。彼らは聖書を一生懸命読もうというヨーロッパ大陸の運動から影響を受けた人たちだった。やがて英国国教会やイングランドにいても埒が明かないということで、アメリカに移住していった。そこで会衆派教会を花開かせた。それは教義から聖書を読むのではない。一人ひとりが自分自身で聖書を読んで、そして感動を語り、互いを刺激し合い、また互いに成長していく—そういう教会としてスタートしたのです。

しかし実は、これは一世代しかもちませんでした。こういう高い理想を掲げて移住していったのですけれども、第二世代目からは、「まあ、そこまでしなくても」という話になっていきます。せっかくアメリカ大陸に移住したけれど、教会に行くのも面倒くさいし、親たちは聖書を読むのが好きだったかもしれないけれども、自分はそうでもない。第二世代からは早くもこの理想は崩れてしまうのです。

第三、第四世代となる100年もたった頃には、この理想は倒れかけていたのですが、ジョナサン・エドワーズという会衆派教会の牧師が巻き起こした「大覚醒運動」によって息を吹き返します。彼は1734年から10年ほど、「もう一度自分たちはアメリカに渡った時の理念に戻ろう」、「信仰を再構築しようとした想いに立ち返ろう」と呼びかけました。彼はこういことを言います、「我々が今、ここにいるのはあたりまえのことではないのだ」と。皆さんもそうですよ、同志社に今いるのはあたりまえのことではないんですよ。「やっぱりすごい力が働いて今ここにいるのだ」、18世紀のアメリカにいた人々も心にそう思いました。「よく考えたら、自分たちの先祖はイングランドの片隅で暮らしていたはずなのに、なぜ今、我々はアメリカで暮らしているんだろう。それは、イングランド時代と同じように安穩として暮らすためではないのだ」。

もう一つ、その時代に根を張っていた合理主義とか効率主義に対抗する理想もありました。合理主義とは、皆さんもあちこちで耳にされると思いますが、こういうことです。我々には理性がある、判断力がある。だから、いちいち教会や神様から指示を受けなくても、自分自身に判断力があるのだから、教会も神様も聖書も必要ない。極端に言えば、こういう考えに結びついていくんですね。欧米では18世紀に合理主義が大変幅を利かせていたのですけれども、もう一方ではみんな、本当にそんなのかなと思っていたわけです。現代の我々もやっぱり、お金は大切ななと思っている。一定のステータスって大切ななと思っているかもしれない。でももう一方では、本当にそんなかな、と感じることもあると思うのです。自分を静かに振り返ってみたら、本当に大切なものって、お金や名譽とは別のところにあると考えていると思います。

神学者のジョナサン・エドワーズ(1703—1758)はこういう主張をします。今までアメリカの人々は合理主義一辺倒で、神とか自然とかと自分とを切り離して、自分だけで生きているのだ、と言ってきたけれども、実際には我々は大自然の中や社会の中で生きている。自分をそこから切り離す必要はないのではないか、と。神との一体感の中で考えていいのではないか。合理主義のように、無理に神とか自然とか宗教から自分自身を切り離す必要はないのではないか—こういう「自然との一体感」を特徴とする宗教観を述べます。

そして「普遍的な神観」についても語ります。自分にとっての神は、あの人にとっての神でもある。どの人にとっても神なのだから、神について自分に都合よく考えるのをやめよう、と。あちこち見るとそういうことが多いですね。神さまは私の味方ですか、神さまは私の考えと一緒にすると言う人がいるかもしれませんが、そうではない。神は自分だけの神ではないという立場を立てます。

そうして、むしろ他者に奉仕できるような人となるための「自己鍛錬」を提唱します。そのために自分自身を律し、それによって自立し、隣人と連帯する土台を形成する。エドワーズは、こういった立場を会衆派教会的な信仰として語り継いでいきました。今申しあげたことは、私が同志社大学で学んだ恩師・竹中正夫先生の「ニューイングランド・ピューリタニズムと新島襄」という論文から教えられたことです。会衆派教会的なキリスト教理解としてエドワーズの時代に語られてまいりました。

海外宣教団体（アメリカン・ボード）の設立

エドワーズの運動は、孫でイエール大学の学長を務めたティモシー・ドワイト(1752—1817)という人が第二次大覚醒運動として継承します。1790年代半ばのことで、1730年代から40年代にかけてエドワーズが第一次大覚醒運動を行い、人々の気持ちは奮い立ったのですが、その後はだんだんしぼんでいきました。しかし、18世紀の終わりにエドワーズの孫のティモシー・ドワイトが、大きな役割を果たしていきます。そして1806年夏、マサチューセッツ州の西のはずれにあるウィリアムズタウンという町のウィリアムズ大学で、もう一度、大覚醒運動に沿った、そしてアメリカの建国理念に沿った運動をしていくことではないか、という若者が出てまいります。その人たちが海外伝道をしようと言いはじめます。アメリカはある意味で最初の理念を失っているかもしれない。もう一度それを思い起こすために、かつて自分たちの先祖がイングランドから海外のアメリカに出ていったように、我々も今度はアメリカから海外に出ていくことによって、その時の精神を呼び起こそうではないか、という運動を始めていく人が出てきたのです。なぜ自分の足下ではなく海外なのか、という疑問をよく聞かれます。しかし別の土地に立ってみて、初めて自分たちの課題が見えてくるということは、しばしば起こりうる話です。

皆さんの中にも海外旅行をなさる人は多いでしょうし、そういうことだけではなく、ご自分の故郷から京都にいらっしゃる方も多数おられると思います。離れてみて初めて自分の国や故郷がもつ価値が見えてくるとか、それが掘り起こされる、という経験をしていらっしゃるのではないのでしょうか。あるいは、これから経験されることがあるのではないのでしょうか。今申しましたウィリアムズ大学の人たちは、そういうことを考えたのでしょう。アメリカから出てみることによってアメリカの当初の理念を思い起こし、それを今のアメリカの人たちに伝えることが大切なのではないか。もちろん、そのように言う、海外伝道とは単なる手段に過ぎなかったのか、という批判も湧いてきそうですが、彼らは、海外伝道も一生懸命やる、それによってアメリカの精神の掘り起こしも一生懸命やる、と。彼らの一部はウィリアムズ大学を卒業して、会衆派のアンドーヴァー神学校に進みます。これは後に新島襄がさんだ神学校です。ですから、新島先生の先輩ということになります。

さて、ウィリアムズ大学の卒業生の一でアンドーヴァー神学校に進学したサミュエル・ミルズが、その海外伝道への希望を神学校の教授に話します。1810年6月24日のことです。すると教授は、そのことを4日後に開催されるマサチューセッツ州の会衆派教会の総会で話せと勧めます。彼はそれを受けて、演説をします。「さあ、みんな、我々はこれから海外伝道をやろう。会衆派教会に海外伝道の拠点をつくろう」とアピールします。すると、すごいことに、アメリカってそういう国なんだと思うのですが、その日のうちに、海外伝道の団体創設が決議されます。そうして9月5日にコネチカット州ファームントンで正式に設立総会をしました。この団体は通称「アメリカン・ボード」と呼ばれます。その2年後にミルズを最初の宣教師として海外に派遣しました。

日本伝道の開始

会衆派教会がつくった海外伝道団体アメリカン・ボードから、宣教師たちがトルコやアジア、中国へと派遣されていきます。しかし、日本についてはご承知のように、長らく鎖国が続いていましたから、宣教師が送られることはありませんでした。19世紀の半ばにペリーが来航して少しはゆるめられますが、伝道が可能となったわけではありません。とはいえ、まったく関心外だったのかという、そうでもありません。1820年代の末のことですが、アメリカン・ボードの役員であったウィリアム・ローブス家での家庭集会で毎回献金をし、海外伝道のために祈っていました。その際、この献金をどの土地への伝道に用いるかと話し合い、机にあった日本からの輸入品である竹細工の籠を見て、鎖国状態にあるが、未来の日本のために使おうと祈りました。総額は27ドル87セントだったといいます。その後、継続的に献金が献げられます。また、教会の婦人たちが裁縫会を行ってバザーで販売し、献金したということも報告されています。そして、日本への宣教師派遣が決定する1869年10月のビツバーク総会までには、4000ドルほどが献げられていたということです。

アメリカン・ボードが最初の宣教師を日本に送ったのは、明治維新後の1869年のことでした。皆さんは世界史でアメリカの南北戦争を学んでいらっしゃる。1861年から1865年まで続いた戦いのことです。今年は終結して150年の記念の年ということになります。戦争が終わって、しばらくしぼんでいた海外伝道の気運が再び高まってまいります。アメリカ人同士の戦いが終わって、もう一度、海外に宣教師を派遣し、アメリカ本来の姿を取り戻そうと願ったのだと思われます。

そうして1869年11月、ダニエル・クロスビー・グリーンと妻のメアリー・ジェイン・グリーンが、アメリカン・ボードから初めて日本への宣教師として派遣されます。お二人は実は新島先生のお墓のすぐ隣に眠っておられます。文字通り、日本に骨を埋められたのです。グリーン夫妻は最初横浜に到着し、短期間築地の居留地に滞在した後、1870年3月に神戸で伝道を始めました。新島襄も遅れて1874年にアメリカン・ボードの宣教師として帰国したのです。そういうことから、同志社は、会衆派教会、アメリカン・ボードと非常に深い関係があると申しあげたのです。

アメリカン・ボードは最初の宣教師を1812年に派遣したのですが、その時も「non sibi」、「自分のため、ではなく」という言葉が合言葉のように語られていったといえます。そして、1869年に日本にアメリカン・ボードから最初の宣教師が送られてきました。お配りした資料の写真をご覧ください(写真(1))。1870年代前半に神戸にいたアメリカン・ボードの宣教師の写真です。前列にはグリーンさんが座っています。後ろの列の真ん中にデヴィス宣教師。この人については、同志社の創立記念の日である1875年11月29日の朝8時、同志社を開校するためのお祈りの会の出席者として知られています。新島襄と最初の6人の学生、そしてデヴィス氏がその祈りに加わっていました。デヴィスたち

とともに日本での伝道を開始していったわけです。その時にも「non sibi」、「自分のため、ではなく」という精神が大切にされたと言われます。そして、一人ひとりの信仰を大切にしていくなか、会衆派教会は、西洋の知識を押し付けるといったことではありませんでした。一人ひとりがどのように納得して、充実して生きていくかということを考えていく。そういう教派からの宣教師として彼らは伝道活動を始めていったわけです。

会衆派の精神を生きた人—イライザ・タルカット

残された時間も、少なくなってきました。ここでイライザ・タルカットという女性宣教師を簡潔に紹介したいと思います。タルカットは同志社ともかかわりがある人で、同志社がたてた「京都看病婦学校」で働かれていた方です。この「京都看病婦学校」は、烏丸を今出川から少し下りたところ、今、KBSホールになっているあたりにありました。この人は1875年10月、同志社創立より少し前に、神戸女学院を創立した人です。タルカットのことを、会衆派の精神を生きた人ということで紹介させていただきます。この人はアメリカン・ボードから派遣された宣教師ですが、この一族がアメリカにきたのは8代前の、ジョン・タルカットの時代で、1630年代のことでした。

ジョン・タルカットはイングランドのエセックスという町の出身でしたが、先ほど申しました非分離派の一員として、その信仰を貫こうと、アメリカ大陸に移住します。トーマス・フッカーをリーダーとするグループでアメリカにきました。フッカーはコネチカット州の最初の州知事になった人で会衆派教会牧師ですけれども、ジョン・タルカットは最初、フッカーと一緒にボストンにきました。1632年のことです。4年後にボストンを離れて150キロメートルほど西に移り、ハートフォードという、現在のコネチカット州の州都となっている場所に町を建てます。先住民を除く最初の住民となりました。彼らはまず最初に教会をつくる。その後、周囲に広がりながらタルカット家は大きくなっていくわけですが、ジョンから数えて7代目のラルフと妻スーザンの代にロックヴィルに移住します。ハートフォードの北東20キロほどの誰も住んでいないところです。7代前の先祖がイングランドからやってきてハートフォードの街の、移民としては最初の住民となって、まず会衆派教会をつくり、そして一族はハートフォードの周辺、あちらこちらに移住していきます。その際も、まず最初に会衆派教会を創立しました。タルカット家は会衆派教会を忠実に支える一族でした。イライザ・タルカットはそのような一族に、ラルフとスーザンを父母として、1836年に生まれました。

来日まで

イライザは地元の小学校を卒業した後、実家から見るとハートフォードを挟んで反対側にあるコネチカット州のファーマントンという街のミス・ポーター女学校に入学し、卒業後、母校の教師を務めます。18歳でフランス語とラテン語の教師になったというのですから、優秀な女性だったのだと思います。その後、母が死にます。幼い妹さんがいたものですが、教職を辞して、実家に戻ります。ところが翌年、残念なことに妹さんも夭逝し、イライザは州立の師範学校（現在の中央コネチカット州立大学教育学部）を卒業して教職に就きます。この時代はそうだったのかなと思うのですが、採用試験があったわけではなく、「来てほしい」、「残ってほしい」と請われて、教師を務めたようです。ミス・ポーター女学校に入学して卒業後、創立者のポーターさんから請われて学校に残り、大学を卒業した後、あちらこちらから招かれて教師を務めました。

1863年から1868年まではデトロイトに滞在しています。この期間は何をしていたのか実はよく分からないのですけれども、ちょうど南北戦争の時期です。どうやら南の方から逃げてきた奴隷の保護運動をしていたようです。Underground Railroadという地下運動です。もちろん彼女は北部に住んでいますから地下運動ではありませんが、元奴隷たちの保護運動に携わります。そして1868年から1872年まではプリマスという母スーザンの故郷で、叔父の妻の看病—現代で言えば、介護にあたる仕事を引き受けます。これも、「ちょっと来てちょうだい」と請われて、それまでのキャリアを捨てて従事します。そして1872年秋、プリマスという街でアメリカン・ボードの宣教師の帰国報告会が開かれました。彼女はそれに参加して、少しばかりその宣教師と意見交換をしたらしいのですが、そこで「あなたは、ぜひ宣教師になりなさい」と勧められるのです。彼女は元来、慎ましい性格の人で、辞退されたいののですけれども、強く請われ、宣教師として立たれたわけです。

宣教師としての活動

そして翌年の1873年に、日本にやってきました。彼女は1873年3月1日、アメリカを出発したのですけれども、日本では同年2月25日まで実はキリスト教禁止の高札が出ていた時期でした。キリスト教は禁止されていたわけです。インターネットなどない時代ですから、彼女は日本でキリスト教禁止が解かれたというニュースを知らないままアメリカを出発したのです。すごく芯の強い女性だと思います。3月31日に神戸に着いて、グリーンさんらが始めていた英語学校を手伝います。そうしているうちに、夏前のことですが、彼女は、神戸から見て六甲山の北側にある三田という街に住む女性たちと知り合います。彼女らから、自分の娘たちのための学校を開いてほしいと請われます。タルカットは、教員として残るよう言われたときも、介護にあたるよう願われたときも、デトロイトに赴くよう声掛けされたときもそうでしたけれども、非常に他者への共感性の強い人で、このときも「やってみよう」と、学校—私塾をつくります。それが神戸女学院のルーツになります。1874年には神戸の教会の設立にかかわり、翌75年には、私塾を発展させるかたちで、「女学校（によがっこう）」を創立しました。これが神戸女学院の最初の形態でした。同志社より1カ月半早く、10月12日に創立しました。

タルカットはその4年後、岡山やいろいろなところから伝道に来てほしいと声がかかると、もちろんその時の仕事を放りだしてということではなくて、次の責任者を育てて、岡山に行くわけです。京都で、同志社のサポートもします。最後は神戸の女子神学校で教授を務め、1911年、神戸でお亡くなりになりました。彼女は死に際して聖書を自分で選ばれます。「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい」。これは旧約聖書のコヘレトの言葉9章10節に出てくる言葉です。これが会衆派教会のメンバーとして生きた彼女の生涯を語る言葉でした。

私はタルカット先生の生涯とお人柄を思うとき、同志社がつくりあげようと、送り出そうと願っている人間像と非常によく重なり合うものを見る思いがします。最初、会衆派教会は聖書をきっちり、自分で納得できるように読もうという運動から始まりました。聖書はこういうものだという、何か無理な方向付けをするのではなくて、一人ひとりの読み方を大切にしていました。一人ひとりを活かすということです。そしてある人が、こういう具合に生きたいと思ったときには、迷うことなくその人に寄り添う。このような他者本位のありかたを、新約聖書で使われているギリシア語から「アガペーの精神」と呼ぶことがあります。アガペーとは、ギリシア語で愛、自己本位ではなくて他者本位の愛の様態を表す言葉です。私たちは「愛」という言葉を使いながら、誰かを自分の思い通りにしようとする、自己本位の思いに走ることがありますね。「君を愛しているから、君の幸せのために、私が言うようにしなさい」という具合に、自己本位の思いに巻き込んでしまいます。そうではなく、他者本位のアガペーの精神で生きていく。正解はこれだと固執するのではなく、この人の思いがこうであるならば、その人を活かす上で私は何の手伝いができるだろうかと考える。自分の希望はこうだから、周りの人を全部自分の考えるように巻き込んでいくというのではなく、目の前にいる隣人に対して自分はどのように生きたら、この隣人のふさわしいパートナーとなれるかを考えてみる。望ましい、喜ばしい人間像とは、自分はこの人のふさわしい同道者となることができるかというところを考えていくところに見いだされます。「呼びかけに応える」。ある人からの呼びかけに対して非常に素直に純朴に、そして何かの駆け引きや打算もなく、応えていくのです。

終わりに

「人一人八大切ナリ」。これは、新町校舎に掲げられている新島襄の大切な言葉です。これは1885年12月18日に行われた同志社創立10周年の時、新島襄が式辞の中で語った言葉だと伝えられています。新島襄はアメリカ出張からの帰国直後でした。その出張中に同志社は退学者を出してしまった。その退学者は何か不祥事を起こしたのでしょけれども、新島襄はその決定にかかわることができなかった。アメリカから帰ってくる前に結論が出されてしまったので、新島は非常に残念に思いました。それで10周年の記念式典という晴れやかな場所で、本来ならば、「同志社は素晴らしいところですよ」と大々的に打ち上げ花火をあげたいようなその場所で、新島は、退学者を出してしまったと、まず負の問題を語り始めます。そう語った後、「諸君、人一人は大切である」と言い、間をおいてもう一度、「一人は大切である」と繰り返したと伝えられています。「過去はすでに過ぎてしまったことなのでどうしようもないけれど、我々は今後、用心深くありたいものだ。人一人は大切である」。神学部で教授であられた本井康博先生によれば、新島が「一人は大切である。一人は大切である」と2回繰り返した、その最初に言った「一人」は退学者のことだろう。しかしその次は我々がこれから出会っていく一人ひとりのことだ、と。「大切」という言葉は最初に聖書が日本語に翻訳されたとき、「愛（アガペー）」を「お大切」と訳した、そういう言葉です。我々は「愛」というのは普通に分かっているように思っているけれども、明治期の日本人はすごく困ってどのように訳したらいいのかよく考えて、「お大切」と訳したのでした。

私は新島先生のこの言葉「大切」が、アガペー、「愛」という言葉と重なりがあると思っています。一人ひとりに愛を注ぐ。他者本位の生き方をする。一人ひとりが生きるためにどうしたらいいのか。自分の目の前にいる人に寄り添っていくには、大切にするにはどうしたらいいのか。このことをまず考えました。しかしそのことによって私たち自身が生かされているということや、私たちはこのキャンパスで学ぶ中で体に刻みこみたいと思うのです。そして今、この同志社の中にもその空気が、その風が吹いていると思います。「人一人は大切である。一人は大切である」。一人ひとりに愛を注いでいくんだ。しかしそれによって私自身も生かされていくんだということを忘れずに、この空気を吸って広く世界へと羽ばたいていっていただきたいです。

【参考文献】

森孝一『宗教から読む「アメリカ」』講談社 1996年
竹中正夫「ニューイングランド・ピューリタニズムと新島襄」『新島研究』96 洗心会 2005年
竹中正夫「汝の若き日に」『学院史料』第22号 神戸女学院史料室 2008年
飯謙「来日前のイライザ・タルカット—新資料」『学院史料』第24号 神戸女学院史料室 2010年
津上智実編『山本通時代の神戸女学院』日本キリスト教団出版局 2015年

2015年11月5日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川校地「講演」記録